

慈

光

第五卷

第十二號

次

心光の照護を被る——花田正夫：(1)

目

三願轉入に就いて——福島政雄：(5)

昭和二十八年七月二十三日
昭和三十八年十一月十五日
發行(毎月一回、十五日發行)

(通第五十七号)

心光の照護を被る

花田正夫

私共が佛典を拜読し、先輩知識の教を被る時、照と護の二つの大きな恵みを被るのであります。照とは佛様の、智慧の照しをうけて私共の生活の全体が見えて来ることであり、護とは照し出された私共の心身の隅々まで、佛様の慈悲を無限に被り何処までも護り続けられてゐるといふ事実であります。

佛心の照曜と護念、それは嬰兒をまもりそだてる父であり母の如くであります。

佛智の照曜

佛弟子ピンヅル尊者が或る王に向つて人生の全体を譬をもつて説いたのが有名な古井戸の譬であります。略述いたしませう。

朝毎に東天から美しい光を放ちながら昇る旭日を仰いで遙か東方にきつと美しい理想の国があるに相違ないと思ひ

こんだ一人の青年が、住み馴れた故郷の町を捨てて、野を過ぎ、河を涉り、丘を越えて、東へ東へと旅を続けた。然し行けどもく太陽に近づけず、理想の天地は一向に見出せない。

疲れはてた旅人が、故郷を憶うて後方を振りかへつて見ると、驚いたことにはそこに砂塵を立てながら巨象が旅人めがけて迫つてゐた。旅人は東へくと懸命に逃げた、然し巨象の歩みは早い、段々と距離はせばめられるばかりである。そこに幸に一つの古井戸があつた。樹の根が深く下つてゐるので、それを伝つて井戸に深く身を隠した。

象の難から逃れた旅人がホット一息して井戸の底をのぞくと、そこに一匹の龍が口を開けて旅人の落ちるのを待つてゐる。四辺を見ると四匹の毒蛇が鎌首をあげて今にも飛びかからうとしてゐる。

そして旅人の手と云はず足と云はず蜂が群つて刺し続ける、それは樹根を伝つて降りる時、蜂の巢をゆすり蜂を怒

らせたからである。

斯うした旅人の耳にゴリゴリ／＼と言ふ音が間断なく聞える、それは白鼠と黒鼠がかはる／＼樹根を噛んでゐる音であつた。やがて生命と頼む樹根の切断される日も近い。かてて加へて古井戸の内外に煙がみなぎつてゐる、野火が曠野の全体にひろがつてゐるためである。

絶望の底に沈んで、放心した旅人が口を開けたまま空を仰いでゐると、その口中に何んとも言へぬ美味、甘露とも云うべき蜂蜜が随時五滴落ちて来る。旅人はこの五滴の蜜のうまさに舌鼓を打ちながら、身辺に迫る危険を忘れてゐる。

樹根とは生命。白鼠黒鼠とは昼夜。巨龍とは死。四匹の毒蛇とは四大不調の病。蜂の刺とは随時随所に繰り返す邪見の針。野火は老病であります。五滴の蜂蜜とは五欲の甘露であります。食欲、色欲、名欲、財欲、睡眠欲などの飽くことを知らぬ欲求の満足を追うて、身の危険、人生の暗黒から眼をそらしてゐるのであります。

この譬を私が始めて聞きましたのが、岡山の高等学校時代、級友の一人が急死して、もののあはれを友人同志で深く感じて居りました時で、担任教授の池山先生が話して下さいました。そしてこの説話の全体が、否定することの出

来ない、真実さで私の心に沁みとほりました。

かうした教が心にとどけられるのをきざみとして、東方の旅から、西方二河の旅への心の準備が整へられるのであります。そして人生の消極面にいよく徹せしめられる、それは佛のかねてしるし召す世界であり、そこに徹せしめられると共に身に無限の大悲を被つてゐることを知らされます。そこに消極から大積極の一步がひらけるのであります。「消極のない積極は、積極のない消極と同じく無力である。大消極に徹して大積極が生れる、そこに大乘佛教の眞意がある」と近角先生は大切に諭されました。

佛慈の護念

さて「一切の往生人等に白さく。今一つの譬喩を説いて信心を守護し、外邪異見の難を防がん」との善導大師の悲心にうつる人生の全景、それが二河白道の譬であります。

「譬へば人有りて西に向うて行かんと欲するに百千の里あるん云々」とあります。西とは夕陽の沈むところ、星も月も帰するところ、そして昼間の難路から静寂なやすらぎといこひのあるところでありませう。古井戸の旅人は「男子志を立てて郷関を出づ」と云う趣がありますが、その逃れられぬ陥井が光のない古井戸の惨状であると教へられ、そこ

に一転して西方の旅が始るのであります。何故さうなるかと申しますと、佛様が人生の虚妄の姿を照見されて私共が求めず願はぬ前から不請の友として護念哀ひんし續けて下さつてゐる、その願力、その念力に悲引されて心が西に向ふのであります。丁度觀經に韋提夫人が西方淨土を願ひますと積尊が微笑せられる、そして佛力によつて西方を選択申したことが明らかになされて居ります。子が母を求め、それに求むる力なき前から四六時中念じ續け給ふ悲母の念力にひきつけられるからであります。

西方の旅は段々進んで無人空曠の沢、四辺に人物なく、一人ほつちになる。そこに多くの群賊惡獸が襲ひ来るのであります。

無人空曠とは、萬人の逃れやうのない、それでゐてどうすることも出来ない問題に触れる時、人生の孤独が心にしみわたる。人生を表面から見ると親兄弟友人等と賑やかさうであります、いざ死に臨み、或は大事に直面して何の力、何の頼みがありませうか、さうなると「親不知、子不知」であります。多勢居るまんま寂として声なき孤独であり、それは萬人の逃れられぬことであります。

そこに参りますと古井戸の譬では五種の甘味であつた五欲の蜜は、西方の旅では群賊、惡獸、毒蟲と転じて居ります。

とか垣で、面を壁にぶつつける、どうにもならぬ姿を申すのであります。その当然の結果は「一生造惡の身」と表白されて居ります。

斯うした人生の大暗黒裡に、釈迦彌陀二尊の縦横無尽、自在無得の大活動が存する。それが東岸の声、西岸の人と顯現する。

東岸上の積尊の声は、無人空曠、群賊惡獸に襲われ、水火の波浪を前に三定死をさだめとした身を見きはめ給うて切々として、「行者、道を尋ねて西に向つて直ちに行け、必ず死の難なけん」と保証せられる。

西岸上の彌陀は眉間に白光を放ち給うて、無限に焰を吹き出し、無量の浪を湧かせる、四大(地・水・火・風)の身、五陰の心、肉体と精神の全体を攝護し給ふのであります。この彌陀佛の、限りない、護念、攝取の佛心を、善導大師は

「汝、一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん。すべて水火の難に隨することを畏れざれ」

と告げしらしめて下さる。そのお心のやるせなさを、池山先生は「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」と迷ひ兒の歸りを待つ悲母になぞらへて意訳せられました。又先生

更に西に向つて走れば、底のない深淵から焰と浪が無限に吹き出してゐる、その水火の二河は南北に流れて辺際がない。中間に四・五寸の白道があるが渡れさうにはない。行くも死せん、とどまるも死せん、退くも亦死せん、一種として死をまぬがれず。

私はここに詩聖ゲーテの、青年の頃に起筆して、晩年彼が死の直前にやうやく書き上げたファストを想ふのであります。

「人と物とのけじめなく、欲求の趣くところ、欲するものはタくり、無用となると足蹴にかけて、まつしぐらに欲求を追うた。然しその何処にも眞の満足は見出せない云云。」「眞の満足は人格の無上の向上、よりよくなるどころにあるが、悲しい哉、心の翼に身の翼が副はない」と告白して居ります。

盤理禪師は「煩惱具足の凡夫が、煩惱を相手どつてどうやつて見ても、血で汚れた血を血で洗ふのと同じである」と警告せられて居ります。

道綽禪師は安樂集の下巻の始めに「余は五翳、面牆なり」と悲歎せられて居ります。翳とは塵、煙、雲、霧、などのために眼が覆はれて一寸先も見えぬことであり、墻とは壁

は岡山の篤心者、中村さんに「一心正念直ちに來ると読んでもまさか見当ははずれて居まいね」と告げられて非常なお歎びの模様であつたと承ります。更に一心正念とは「ただ」、直來とは「念佛」であると繰り返してをしへたまはりました。

佛智照曜するところ、身を極微に碎くとも報佛の功德のそみ給はぬところは、私の身心の全体をそのまま照し出し給うて、悲心切々、残る隅なく、心も言葉も及ばぬ大なる慈悲をたまはつて居るのであります。我あるところ慈悲は常に寄りそひ給ひ、慈悲あるところ我身の罪体が存するのであります。

噫、然し私自身の煩惱に覆はれた心にはかかる廣大無辺の大慈大悲の御眞実も、僅かに四・五寸のせまく、小さく、あぶなけな道としか感ぜられないのであります。所謂よろこぶ心もなく、いそぎ淨土へあまりたき心なき者であります。然しさうした私だからこそ、そこをかねてしるし召し、ことに憐み給う大慈大願がましますのであります。水も漏らさぬ大悲の程、いよいよたのもしき限りであります。

三願轉入に就いて

福島政雄

今日は十八、十九、二十の例の三願、むづかしく言ひますと三願轉入に就いて申し上げます。聖人御自身が教行信証の中で、自分は第十九願に行かうとして徹底出来ず、第二十願でも徹底出来ないで、遂に第十八願で徹底したと申されて居ります。言葉は非常にむづかしく申されてゐますが第十八願で落着いたと告白せられてゐます。聖人のその心持にもとづきまして三願の關係、私共の心と三願とがどうなるかを申し述べたいと思ひます。

第十八願のこころ

さて十八願のこころを一口で申せば、法藏菩薩のまことが私共にとほることでありませう。その法藏菩薩とは、まことのいのちのかたまりとでも申しませうか、まことがいのちとなつて私共のいのちにかよつて、私共のいのちを呼びさまして下さる根本のまことの働き出るかたちであり、いのちであります。法藏とはみよりのくらであります。大きなまことのいのちが動き出でようとしてまだ藏の中におさ

ります。それをおこさせて下さる、そこにお慈悲の働きがあります。佛のまことが斯様に智慧と慈悲となつて私共の生命に働きかけて下さる、それが至心、信樂、欲生となつてゐるのであります。

一心といふ言葉は大無量壽經の下巻の五惡段のところに入間の罪惡煩惱の姿をこまかに示されてありますところ「一心制意、端身正行」とあります。この一心と十八願の至心とが一つであります。至心、信樂、欲生は三つであります。佛の一心の働き一つであり、これが私共の生命にひびく、その結果乃至十念となる。乃至とはすくないもの多しものをつなぐ言葉で、一念乃至十念である。一念とは一度南無阿彌陀佛と申す、十念は十遍念佛することでありませう、広い意味では一生涯申す、この身がなくなる、その時までの一生涯の念佛であります。佛のまことが我々にひびいて、一度の念佛、又は一生涯申す念佛も、皆その人を佛のまことの世界に生れさせて頂けることになつてあります。それには「若し生れずば正覺を取らじ」と云ふ力強い誓ひがあります。このまことの世界に、一度でも念佛した者が生れないならば自分のさとりはひらけぬとの誓ひであります。それですからまことの心が衆生に徹するのと、佛のさとりをひらくのとが同時となつて居ります

められてゐる姿であります。藏のうちにもまことのいのちとなつておさめられて、それがやがて私共に出現し、働きかけて下さるのであります。このまことのいのちの働き、そこに十八願があります。

さて十八願に至心、信樂、欲生が誓はれてあります。

至心とは、法藏菩薩のまことが私共のいのちにとどいて下さるのであります。その働きかけが信樂と欲生の二つになるのであります。信樂とは信じてねがふとの意味であります。昔の講者も、信樂とは佛の智慧の現れであり働きてあると申して居られます。欲生は佛の慈悲の現れであり働きてあります。

佛のまことが佛の智慧となり私共の心の隅々まで照され私共がそれを身にうけて、それが願はしいまことの境地となり、私共の姿がそこに見えて来るのであります。するとさう云ふ世界に生れたいとなり、眞実の世界を求めたい心がおこされる、これは佛のまことがとほつておこる心であ

一切衆生が自分の心持を受け容れるといふところにとりかひらける。一切衆生を問題として、生命をかけて十八願を建てて居られるのであります。「若不生者」若し生れずば、「不取正覺」正覺をとらじ、とは強いお言葉であります。一切衆生、いかなるものもまことの世界に生れさせたい、この佛の心持が衆生にひびいて、衆生が一度でも我名を呼ぶものは、そのとき必ず我國に生れることになる、それは自分の生命がけの問題である、斯う云ふ心、これが佛のおこころであります。

十八願の末尾に「唯除五逆誹謗正法」とあります。五逆罪とは、父を殺し、母を殺し、聖者を殺す、僧侶の和合を破る、佛身より血を出す、といふひどい悪いことであつてその重罪の者と、又正しい法を謗つた者は取り除くとあります。

一体この唯除以下はどうしたところでありませうか。法藏菩薩は一切を攝し給ふのであります。積尊が斯様な重罪人は除くと云はれて居ります。

これに對しまして昔の人は、それでは觀經はどうなるのであるか、觀經に九品の往生が説かれてあるが、下品下生の機類は五逆の罪を重ねた極惡の人である、不善業を作り五逆十惡の罪人である、さう云ふ者も死に臨んで善い友達が「お前はただ念佛を口に申せばよい」と南無阿彌陀佛

を称へさせる、すると五逆十惡の者が、まことの世界に生れさせて頂けると觀經にはつきり説いてある、すると、唯除は積尊の御言葉としてどう云ふ意味があるであらうかとありますが、それは福島県相馬郡中村での出来事であり、そこに大切な息子が中学生の頃に不良化して了つた父親は「お前の様なものは家におけぬ、勘当だ、出て行け」ときびしく叱つた。この子もすこすこ家を出て行つたその時母親を父親が呼んで「お前はあれに小遣錢をやつたか」と問ふと「やつて居りません」と答へた。すると「馬鹿！」と大声で叱つた。このことを近角先生が度々話されました。唯除のころはこの父親の心である、お前の様な者は勘当する、出て行け、の言葉である。但しその父親は「小遣錢を何故やらなかつた馬鹿」と言ふ父親である。これが彌陀の本願と釈迦の抑止との關係であります。成程聖人の御述作の中には「唯除五逆、誹謗正法」をば、その罪の重いことを知らせるために云はれたので、皆をすくひ入れ、攝り入れるためであると言はれてあります。然し、唯除は強くおごそかにひびいて来る。私自身の上から申せば、この言葉があればこそ、十八願が私の心にひびいて来る、これで私自身が五逆誹謗法の者と解るのであります。さうでない、自分は第一に佛から呼ばれてゐる。一番先に

い子であると云ふ風では佛のまことが徹したつもりでも実は徹してゐない、唯除の一句は大事なことで、これがなければ十八願は甘くうけて解らぬじまひになります。唯除五逆誹謗正法の言葉が人生のつまづきを縁として、私の眞の姿が照し出されて、佛の至心、信樂、欲生の御心が我身に徹する、私自身はさうなつて居ります。

それでこの唯除の言葉は釈迦の抑止と領解される。釈迦佛がおさへ、とどめておいでになるのであります。

積尊は五逆の惡人、誹謗法の罪人があれば、それが積尊御自身の問題である。これがある限り自分の問題として苦しみ続けて居られるのであります。私共の五逆誹謗法はそのまゝに積尊をお苦しめ申す姿であるとなりますわけでありませぬ。私共は父を殺すとか母を殺す、そんなひどいことはないと思つて居りますが、双物で親をバラバラにしないが実際に親を苦しめて死ぬるやうな苦をさせてゐる。私も、今頃になつて反省致しますと思ひあたることが数々あるもので、これもすこし解るのであります。

自分は親といふものを殺すやうなことをして生ひ立つて来た、これは種々の問題で解るのであります。男は結婚について親を踏みつけ、親の息の根を止めるやうなことをしてゐます、そこに五逆とはよそごとではありません、自分

生れる者と言ふやうに甘く考へる。私はとくに甘え兒の氣分を持つて居りまして「至心、信樂、欲生我國乃至十念」といふだけでは、必ず生れる、一切衆生のこらす生れるとあります、そこにお慈悲があると甘え氣味になります。そこで「唯除五逆」と、とりのけだと言はれて見ると段々自分が五逆の徒、誹謗法の輩としてまゐります。

自分はまさかさう云ふものではないと思ひ度い、善く思ひ度い。五逆とか誹謗法とかは大それたことである。自分も惡人ではあるが、五逆や誹謗法の重罪人ではないと、自分を善く思つて居ります。

さうですから「五逆誹謗法の汝を除く」ときつく言はれないと、さう言ふ者ではないと思ふのであります。私もこの年になつて、六十過ぎまして段々さう思ふやうになりました。自分はさうでないと思つて居りましたが、自分もさうであつたと、實際の生活の上で氣付かされます。それはすゝどく言はれて始めて氣付かされるので「お前はよい奴だ、お前を何時でもひきとつてやる」では、佛の至心、信樂、欲生のころが徹しないのであります。

私自身が甘えた心で人生の行路を辿つて居ります。そこに五逆誹謗法の者である種々の機会に見せつけられると、始めて自分の五逆誹謗法の姿がわかるのと、佛の至心、信樂、欲生の心が徹するのと同時になるのであります。自分がよ

の問題と感じます。さうでありますから五逆誹謗法とは自分の急所をさされるのであります。人間は急所をさされるとさうでないと言ひたがるものであります。友人や何かに其処を衝き当てられると必ず反抗するものであります。唯除五逆と積尊から急所をさされると、自分はそんな者ではないとなる。それでありませぬから十八願を我身に受け容れることは生やさしいことではありません。

大經下卷の悲化段と五惡段に、私共のこの世の生活の惡いところを一つ一つこまかに述べてあります。そこを讀みますと、自分はさうでないと言へない、私は三毒の煩惱、五惡の相が自分にピタリピタリと解るところが多いにあるのであります。私自身も五惡段の第五の惡のところを、私が二十七歳の三月十一日の晩に、御佛前で讀みまして、よそごとではない、自分のことであるとしれ、非常に感激して泣き伏しましたが、その時から五惡段がわがことと解り始めました、それも私が親に反抗しつづけてゐた問題が縁となつたのであります。

唯除五逆 誹謗正法 とは大切な問題であります、そしてよそごとでない、三毒五惡の自分の正体が解り始める時唯除の言葉が身にひびき、至心、信樂、欲生の佛のまことが、我身にしみわたるものであります。さうですから生やさしく受け入れられるものではないと感じます。

第十九願のこゝろ

第十九願は、發菩提心と修諸功德といふことを説かれてあります。菩提心を發して、諸の功德を修するのであります。佛の位にまで自分は修業して行き度いと願ふ人が、種々の功德善根を積んで、至心に發願して、佛のみ国、まことのみに生れようと思ふ。さう云ふ衆生があるならば、この生命の終りに臨んで、佛はその衆生の前に現れて導くやうにしたいといふのがこの願の心であります。

さてこの臨終に來迎されると云ふ意味であります。私共が修養して立派なことをやつた積りで居ります。そしてこれでもことの国に生れることが出来ると考えて居ります。と、それを佛の方から御覽になりますと、それがいかにも憐れに見えるのであります。

あれで自分は立派な積りで居るが、その裏の裏まで見抜かれる佛様には、その姿が如何にも哀れに見えるのであります。善いことをしたと思ふ中に、よくない慢心がある、それをそれとも気付かずにあることが、佛の御目からはハッキリ見える。こちらはひとかどよいことをした積りでよい氣持である。するとそんなことをしてゐるのでは駄目だ。それでは何ともならぬ自分に目覺めてゐない、それをぢつと見ては居られない、お前のところまで行つて、臨終にま

て、念を我國に係けて、諸の徳本を植えて、至心に廻向して、我國に生れんと欲はんものは、その願をつひには果し遂げしめなければ、正覺は取らない」とあります。

十方の衆生が佛の御名を聞いて、佛国に念をかけ、生れたいと考へ、諸の徳本を植えて徳本とは諸徳の本で称名することを意味する佛国に生れようと思つて、お念佛を自分の功德として、自分がお念佛することによつてそれを一心に佛の方にめぐらしむけて、この功德によつて、佛の國に生れたいと願ふならば、この衆生を果遂せすばとあります。結局はそれを我國に生れさせてやりたいといふ願であります。

この願で注意せねばならぬのは、念佛を申しますが、これを自分の功德と考へて居ることあります。称名念佛は、親のまことのいのちがこちらにひびいて、そこからあらはれ出るので、それは佛の功德であるのに、自分の功德の如く思ふ、頂きものを我物顔にしてゐる。向ふから一心に喚びかけられ「ハイ」とお答へしてゐるだけなのに「ハイ」とお答へしたことを非常な功德と考へてゐる、向ふから与へられた功德を我力と思つてゐるのであります。

十九願を願ふ人を自力とすれば、二十願の人は他力中の自力と申すべきでせう。喚びかけて下さるのは佛様だが「

で行つて叩いてやらねば目がさめぬ、早く目をさまして、佛の國にひつぱり入れよう。善いことをしたことにひつかかつて、まことの自分の姿に目ざめてゐないから、出かけて行つて叩いてやらねばならぬ、臨終に迎へに行つてやり度いとはその心であります。迎へに行つて叩いて、眞実の世界に目をさまさせて、結局十八願の世界に入れよう、さうせずには居られない、臨終來迎とはさう云ふことでもあります。

目がさめて居ないから、そこまで行かねばならぬ、諸善万行にひつかかつて、佛の國などは問題にしてゐない、自分は立派にやつてゐる積りでゐる、さうして、そのまま沈んでゐる。

立派にやつたと云ふ思ひをもう一つ反省せしめて、うそばかりであつたといふことを解らせた、それには迎へに行かねばならない。親を忘れてゐないものは、自然に親のもとに帰るが、親を忘れて、陸でもない世界をさまよふ者は、親が行つて喚びさまし、親のもとに連れて帰る外にはない。だから臨終に迎へに行つてやらねばならぬとなつてゐるのであります。

第三十願のこゝろ

次に二十願となりますと「十方の衆生、我が名号を聞いて

ハイ」と答へるのは自分だと考へてゐる。喚びかけの音が徹して「ハイ」と返事申したのでから全く他力であるのに自分の力と持ちかへるのであります。言葉をかへると、自分は御信心を頂いた、まことの心がひらけた、自分は悔い改めて生れ更つて立派になつた、人間としても立派な道を歩む人になつた、まあかういふ考方が二十願の人である。

信心は向ふから開いて下されたが、自分は人間として蘇つて立派にやつてゐる、生れ更つた、転心した、信仰の人として立派な人生の行路、道徳上の問題でも立派にやれるやうになつたと考へてゐるのが二十願の人々であります。自分に信仰がひらけて立派な者となつて、生活態度が立派になつた、これは信仰から生れた自分のよい行ひ、よい働きであるとなつてゐる。

これが何故不徹底であるかと申すと、一休人間が、そんなに立派になつたと言へるのか。私なども二十六歳の夏、心機轉換して、よい心持となり、これからすつかり變つて信仰上からよくやつて行けると考へてゐたが、實際の生活を省み、三十、四十歳と過ぎて行きますと、自分は微塵もよくなつてゐないことがいよいよ知らされて参りました。人生の躰きから躰きを續けてゐる、自分は信仰によつて立派にやつて行けない、實際問題につきあたると、相変らず躰きばかりで、本当の取柄が微塵もないことが知らされま

した。悔い改めて別人となり、立派な人間になり、あつばれの信仰の人となつたと云へぬ、それどころか益々みじめな姿が現実の問題で見えて来るのであります。

これを具体的に打ち明けますれば、五欲の問題、財欲、色欲、食欲、名欲、睡眠欲について自分の問題となります。第一の財欲、これは私の様な貧乏生活者には大した望みはかけられないので、始めから駄目であると思つては居りますが、決して清貧に安んじてゐるとは申されません。歳をとるほど金銭のことに穢くなつたと妻が申します。三十幾年の間、私の生活を裏から眺めて居て云ふのでありますから、それがほんとうの私の姿でありませう。若い頃は金銭にサラツとしてゐたが段々わるくなつたと言はれて急所を衝かれましたのであります。

次に色欲、男女の問題であります、これは全く、申すも恥しい慚愧至極の私であります。

更に食欲。食物につきまして、私は割合こだわらぬと若い時はよく言はれましたが、歳と共に食物のこまかな味ひがわかり出しました。旅先などで「御馳走して下さるな」と言ひながら御馳走を喜ぶ。決して謙を言つてゐるのではないつもりであります、根本は食物に対してもいやしいとおもひます。味ひに対する感覚が年令と共に微妙になつて来ました。

三 願 転 入 の 味 び

この様に味つて参りますと、十九、二十、十八の三つの門があるが、入つて見ると結局十八願ひとつにおさまるといふことになりました。十九願のやうに、自分が道徳を守り善根功徳を積んでゐるなどと思つてよい氣持になつてゐたのは間違ひであつた。又二十願のやうに、自分は佛にすなほにしてゐたと思つたのも嘘であつたとなり、十八願の佛のまことひとつで救はれるといふところに落着かせて貰ふのであります。然もこの自分の姿といふものは、五逆、謗法の姿であると照し出されるのであります。

さて斯様に十八願のひかりを被むると、そこで落着いてしまつて、もう十九願や、二十願に用事がなくなつて了うたかと言ふと、さうではないのであります。臼杵祖山先生からそこを次のやうに聞かせて貰ひました。

「三願転入とは十九願から二十願に入り、更に十八願に転入するのであるが、いよいよ十八願におさめられると、そこで萬事解決して、信仰一点張りでサラツとするかと言へば、実際はさうはいかぬ。十八願の世界に転入せしめられて、そこに腰をいれてみると、十九、二十の願の世界に迷うて行く自分の姿が見えて来るものである。」

このやうに臼杵先生が云はれました。十八願で萬事解決

今度は名譽欲であります、これは若い時からすつとあります。私は長い間學位論文などは決して書かぬときめて居りましたが、広島で西先生から、論文を書きなさい、と勧められ、東京の、友人もさう申しますので、それを提出しましたら、スウツと通りました。すると始めの時の氣持なら別に喜ばなくてもよいのに、実際は御本人の私が一番喜びました。名譽欲が暴露したのであります。

最後の睡眠欲であります、これは若い時から眠れないで薬を飲みます。今でもよく飲みます。眠れないから眠り度い眠り度いとなり、かういふことが續くと心持が病的になります。私には睡眠欲がこのやうな姿で現れて居ります。

五欲の問題はこんな調子で、実際の生活は散々であります。御信心がひらけて立派な人間になつたと云ふことはちつともないので、年令と共に自分の心が穢くなつた、尤も虚栄心があつて、それほどひどくはないと思はうとします、が、実生活がきたないといふのがほんたうの話であります。佛のひかりに照されると、今まで氣付かなかつた自分が見えて来ます、すると念佛申すことが自分の功徳となると言へない、さう思ふことは親の仕事を我物顔にしてゐることと知らされ、この不徹底の者を、遂に徹底せしめて、まことの国に生れしめるといふのが二十願の果遂之願のころであります。

と、お厨子の中に入りこんで、佛と二人きりであるとなつたのではなく、十八願に徹するとは、五逆謗法の姿が見える、矢張り十九、二十の願に迷うてゐる自分の姿も見えて来るのであります。十九願や二十願から足を洗うて了うたのではなく、十八願に腰を下して見ると、まだ十九、二十に迷うてゐる自分の姿がはつきりと見えて来るのであります。成る程私自身の生活の歩みはさうであります。十八願の佛のまことひとつに目ざめたのはほんたうであるが十九、二十の願の世界、修諸功徳や、至心廻向の心からスツカリ離れてゐるかと言へば、さうではなく、そこに未練を感じ、割り切れぬものがあり、自分は悪人には違ひないが、すこしは善いことをしてゐる。自分は何も出来ないの、佛の慈悲と智慧で救はれるのだとほんたうに思ふが、けれども、自分と云ふものがすこしも価値のないものとなつては淋しい、そこに何処か未練が残る。二十願の上で云へば、これでも親を思うてゐる、だからすなほに「ハイ」と返事をしてゐるといふ未練があるのであります。

斯様に十八願に腰を下してゐるのは本当であるが、十九、二十の願と没交渉になつてゐるのではない、何となく未練の情にひかれてゐる。さういふ様に何時まで経つても、自分は善いと思へぬものを憐んで下さる。またすなほに親に向つてゐると考へて得意になつてゐる、するとそこに

これを憐んで下さる佛の涙がかかつて来るのであります。十九、二十の願に未練を持つて迷ふ私に、佛の慈悲と智慧が働いて下さる。斯様に私の生命の上に、佛のいきたまことが働いて下さる。十九、二十に迷ふ心持を常にとかされて参るのであります。これが私の十八願の味ひであります。

十九願、二十願は、このやうな生きた関係を持ちながら十八願に攝取せられて行くのであります。三願転入といふことは、これで萬事解決といふことでなくこの世の生命の続く限り、生命の終りまで、常に三願転入し続けてゐるといふのが、私の実際の姿であります。もう十九、二十の願には用事が無くなつたと云ふのではないと白杵先生からうかがつて、そこをよく感じましたのであります。

これは機の深信といつてもよいのかも知れませんが、機の深信から法の深信に帰ると云つてもよいが、十九、二十の願を細かに考へると、機と法の深信になるのかも知れませんが、味ひの道筋が何処か違つたところがあると思はれます。それですから、信仰は何月何日からきりがついて、立派な生活を純信仰者としてやつて行けるといふものではないといふのが私の問題であります。

矢張り今でもさうだと思ひます。この基督教を徹底すれば第十八願の世界に帰るでせう。佛教でも不徹底の間は、十九、二十の世界に迷ふことでせう。

三願の精神を今一度言ひ換へますれば、十九願は、出来る限り人間のことを尽さうとする態度であります。新島襄先生は基督教の人で、今の同志社大学を創設せられた人ですが、徹底的精進努力の人でありました。「刀折れ、矢尽くるとも、やむこと勿れ」と飽くまで人間のことを尽せと申されてゐました。これが人事を尽す世界でせう。

二十願は「人事を尽して天命を待つ」人事を尽すが、その及ばぬところは、天命を待つ、この上は神なり、佛なりの御心のままにといふのであります。基督教の人がよく言ふことであります。キリストの最後の祈りであるゲッセマネの祈りがそれでありました。人事を尽して、その及ばぬところは御このままに、といふ世界であります。

十八願は「天命を信じて人事を行ふ」といふ世界であります。そこに心のゆとりがあるのであります。人間のことを行つてゐるが、それが皆駄目になることを解らせて貰うてゐる。然し自分がすつかり包まれてゐる天命を信じて、自分の行ふべきことを行ひ、どんな時にもヤブレカブレにならない、人生の餘裕が出来てゐる、これが十八願の信の旅行く人の姿であります。

むすびの言葉

私がかう云ふことを味ひながら、今度の大戰の前に次の様に譬へて見ました。

今ここに、戦場に出掛けて行く人があるとしませう。その中には、今度は立派な働きをしたいと考へる人もあります。

また帰還して自分はさうは思はなかつたが実際に金鵝勳章を頂いた。すると矢張りよい働きをしたのであらうと思ふ人もあらう。

然し乃木將軍のやうな方は、自分は功一級を戴いたが、自分は陛下の赤子を何千何萬と殺してゐるので、金鵝勳章を戴くにはあたひせぬもので、誠に相済まぬと考へてゐるのであります。

この譬で、第一の功名を立てて金鵝を貰はうとするのが十九願の人で、第二の自分はそれほどまでに思はなかつたが金鵝を貰つたのだから働きもあつたといふのが二十願の人であります。更に純粹になると乃木將軍の境地でありませう、これが十八願の境界であります。

基督教の信仰は第二の二十願にあたりませうと申しましたら、或るキリスト信者の方から非常におこられ、それは自分のひとりよがりであると云はれて攻撃せられました。

斯様に三願転入といふことを銘々に自分の生活の上にあてはめると、三つの願が、自分の生活の上生きて働いてゐることを知らされます。聖人は生きた念佛を勧められてゐられるので、信心爲本とは、現実の人生問題を取り入れて居られます、そこに聖人が生きて導いて下さるものがあります。以上が聖人の仰せられた三願転入についての私の味ひであります。

昭和二十七年七月十三日。

白杵老師遺詠

唯途五逆誹謗正法の經文を仰ぎて

除がるる身にしあれども御佛の

救ひたまへるめぐみ尊とし

さからひとそしりの外になきわれに

願ひ護る御名の尊とき

昭和二十三年四月十四日

